名古屋女子大学　紀要　37（人・社）49～57　1991

「開発単元」の変遷（第２報）

森本正巳

The Transition of Units Development (2)

Masami MORIMOTO

はじめに

第１報につづき本稿では「開発単元」の変遷を，カリキュラムや実践記録等から考えてみることにする．

Ⅰ　昭和20年代・初期社会科時代　（1947年～1954年）

１．桜田小プラン　（復興国土計画・昭和22年版学習指導要領の頃）

学習指導要領に「開発単元」は示されていないので，各小学校のカリキュラムにも当然みることはできない．しかし，社会科発足にあたり先導的役割の実践を行った東京都の桜田小学校が，昭和24年（1949年）10月に発表したプランの中に，僅かではあるが開発に関連した箇所があるので，次に取りあげる．

「第４学年　〔作業単元〕　武蔵野　（43時間）

要項　(1)　武蔵野と云う名とその広さ．（河川による大体の境を調べてみる．）

(2)　武蔵野に於ける祖先の生活と環境．（古墳，貝塚，遺跡の見学．）

(3)　地図やパノラマで祖先の生活を経験してみる．

(4)　江戸の起りと武蔵野の変遷．（江戸城と共に次第に街が発展してきた．）

(5)　江戸時代の農村と都市．（江戸の膨張，人口増加による多摩川上水設置，武蔵野の約８割は農村であった．）　（傍線筆者）

(6)～(9)　略」[1)]

地域の発展について先人の貢献を郷土の変遷の姿から学習させる方法が考えられている．開発に焦点をあてた単元構成にはなっていないが，城下町の建設にともなう人口流入が，生活の基盤となる生活用水の需要にかかわり，その対策がいろいろと実施されていることを学びとらせるのである．開発に間接的ではあるが触れる小単元である．

２，大淀小学校「社会科学習指導計画」（国土総合開発法・昭和26年版学習指導要領の頃）

昭和27年（1952年）11月宮崎市立大淀小学校は大淀小プランを発表した．その考え方は極めて地道なものであった．「国語，算数，理科等の各教科がそれぞれの教科でなくしては果し得ない目標や領域を持っているのと同様に，社会科も社会科として独自の立場による目標や領域

を持っていなければならないという考えのもとに立案した.」[2] と述べている．すっきりした社会科を目ざし現実の生活は重視するが，「社会科だけが巷へのり出そうとする傾向をいましめなければない.」[3] と明言している．（傍線筆者）

このような考え方は当時としては珍らしく，調和のとれた教科経営が実施されていたと推察できるのである．

「開発単元」については第四学年の単元の基底を「郷土の開発」とおさえ，６月単元に「用水路」11時間が計画されている．用水路は当時においては，児童が日常よく見ることができる施設であるから，問題解決的学習の展開が容易な教材であった．当然26年版学習指導要領にも「用水路」と単元例に示されていた．

「６月単元　用水路　11時間

目標(1)　水田の多いところには用水路や用水池のあることがわかる．

(2)　用水路や用水池の役目がわかる．

(3)　水田は用水路や用水池によって開発されていることがわかる．

(4)　用水路は多くの人々の苦心や努力によって作りあげられたものであることがわかる．

(5)　用水路を作りあげた人々に感謝し，その保全に協力するようになる．

学習内容（小単元）

(1)　用水路の見学．

(2)　潅漑・排水・防火．

(3)　用水路の分布と水田．

(4)　日本の主な用水路．

(5)　児玉久右衛門の話，石碑の由来.」[4]

米作中心の日本の農業を支える用水路を通して，国土の開発がその土地の自然条件を生かしながら水を求めて祖先の努力が常に行われていたことを学習するのである．まさに当時の「開発単元」の典型的な構成で計画されている．

学習内容が極めて簡単であるし，授業時数も記されていないが，これは担任の手による自由な展開を期待して具体的に綿密な計画を示すことを避けたと付記されているが，この点もよく考えられた指導計画というべきであろう．

1950年代の前半は工業化の声もあったが，それより戦災復興の仕上げとエネルギー（電源開発）が主体であって，各県は総合開発の計画の段階であった．そのため第一次産業特に農業の基盤整備が中心であり，その影響は４年生の社会科の「開発単元」によく示されている．

Ⅱ　昭和30年代前半・第二次改訂時代（1955年～1960年）

佐濃谷（さのたに）川の授業（国土総合開発法・昭和30年版学習指導要領の頃）

この実践は昭和33年（1956年）渋谷忠男教諭により実施され，昭和35年（1958年）に発表されている．渋谷は郷土教育をすべての教科の基盤と考え，郷土（地域）の生活を極めて重視していた．佐濃谷川は京都府の奥丹後久美浜湾に注ぐ延長20.2kmの小河川である．

渋谷はこの河川を中心に地域調査を徹底した上で，資料集をまとめ授業に臨んだ．まずフィールド・ワークから始まり川床に堆積した砂や石に注目させ，川の曲り方や流れの早い所遅い所，浅い所深い所，川に沿った畑での作物などをよく観察させ，その上洪水の話まで聞きとりで考えさせやっと教室での授業へ入った．

指導計画は次の通りである．

「(1)　川がなければ百姓ができない．（１時間）
(2)　佐濃谷川と洪水．（２時間）
(3)　佐濃谷川の改良工事．（２時間）
(4)　佐濃谷川と利根川．（２時間）」[5]

水害をおそれ丘の上に住んでいた人々（祖先）は，佐濃谷川の洪水を防ぐ努力を重ねてきたが，当時の技術と人力では自然の力に勝てず度々の洪水が人々を苦しめた．そして大規模な改良工事へと進んでいった．改良工事を効果的にするには川をなるべく直進させることであった．

児童たちの洪水を防ぐ改良工事の結論も川の直進と堤防を強くすることであったが，改良後の佐濃谷川は曲っていた．なぜ直進させなかったろうの疑問も，ある子の発言，「自分のところの田が改良工事のために川になることはがまんできなかったのだろう」[5]に共感をもって賛成していった．結局洪水対策は霞堤方式になったことを老人からの聞きとりにより４年生なりに学びとっていった．

改良工事の結果，洪水は減り住居は平地に移り機械化のため耕地整理に着手し，村の生活が急に大きく変化し始めたのである．裏日本と呼ばれ奥丹後といわれた地域にも，国の総合開発の歩みが及んできたのである．30年代の前半まだ農業に将来の夢が托せる時代であり，「開発単元」も国の方向にそい進められ明るさの感じられる時代である．（傍線筆者）

Ⅲ　昭和30年代後半・昭和40年代・第三次、第四次改訂時代（1961年～1976年）

１．きょう土の開発「田子の浦港」（全国総合開発計画，新全国総合開発計画・昭和33年版学習指導要領の頃）

この実践は昭和40年（1965年）静岡市立安東小学校で戸田久雄教諭が実施したものである．田子の浦港は昭和33年（1958年）から９か年の歳月と，105 億円の巨費により完成した掘込式築港（人工港）である．田子の浦港を中核とする岳南工業地域は，もともと富士山麓の広い土地と豊富な水加えて駿河湾という自然条件を生かした製紙業の中心地域であった．国の開発計画（全総及び新全総）に立脚した工業化を積極的に進めた結果，大企業の進出があり，浮島ヶ原の干拓も実施されて駿河湾臨海工業地域に発展したのである．

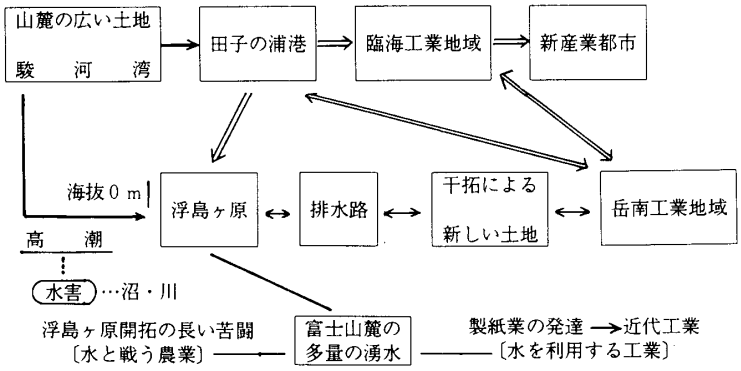
そして田子の浦港は地域の中枢を担う貿易港として誕生したのである．

戸田は教材化にあたり二つのポイントを考えた．

・なぜ田子の浦港を築いたか．（地下水とその利用・工業と港の追及）
・浮島ヶ原の開拓．　（水との苦闘・今後の姿）

以上の考えをもとにして「図１のような指導計画」[7]を立案し，港と浮島ヶ原の複線化の構成で実践をすることにした．

図１　指導計画

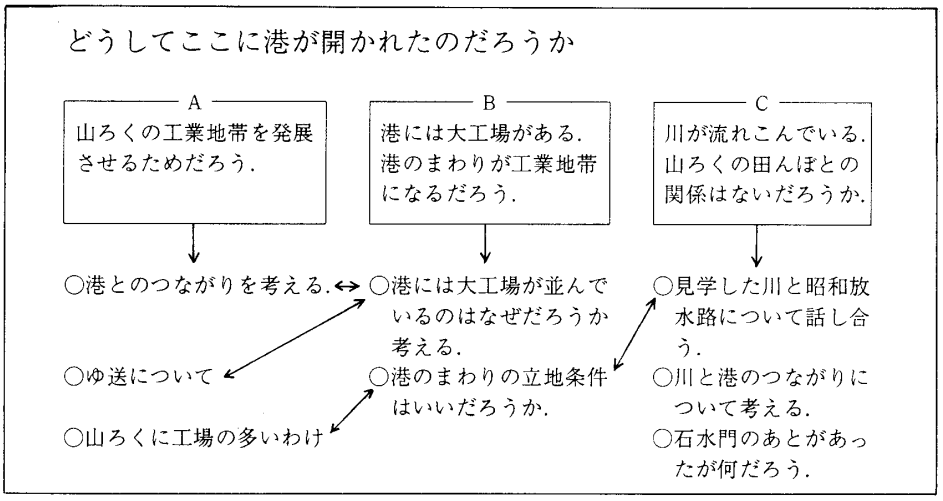


実際の授業は　(1)田子の浦港→(2)岳南工業地域→(3)臨海工業地域→(4)浮島ヶ原の開拓の経過で進められた.

(1)田子の浦港の授業は，人工の港→工場が多い→土地が低いの順で資料をもとにして話し合いで進められた.（第1時～第5時）

「第6時の授業案は，図2のようにA・B・Cの3通りの道すじを考え，時間はかかるがどれに進むか，子供たちにしぼらせた.」[8] と戸田は述べている.

図2　指導案



展開を簡単にまとめると，児童はAコースをたどった．ここまでに6時間もかかったのであるが，4年生にこの地域の開発が，低い土地の干拓――工場誘致――港の建設と理解させるための努力と工夫を重ねてきた．1時間に5～6人の児童にスポットをあてながら教師と児童が粘り強い話し合いと思考を積み重ねて，やっと「新産都市の姿」をつかみあてたのである.

戸田の反省に「こんなに時間がかかるとは思ってもいなかった.」[9] とあった点は印象的であった.

高度経済成長期を迎え，所得倍増計画（太平洋ベルト地帯構想）にむけての工業化に対して国・県・地域が一体となって進めていった姿をこの実践は示している．しかし，陰の部分となる公害（ヘドロ）については4年生という点もあるので5年生で触れることになる.

2．名古屋市の教育課程　（新全国総合開発計画・昭和43年版学習指導要領の頃）

43年版学習指導要領の実施は昭和46年（1971年）4月1日からであった・4年生の「開発単元」について名古屋市教育委員会編の教育課程社会では次のようになっている・

「第5単元　愛知県の開発のむかしと今　　22時間

目　標　(1)　自然の制約を克服し，自分たちの生活の向上に努力してきたことの具体例をつかむ.

(2)　地域社会の一員として地域社会の発展を考える態度を養う.

(3)　地域の開発の様子という視点からの考える力，特徴などを学習に役立てる力の基礎を養う

留意点　(1)　開発の事例の事実を知るだけでなく，どんな意味をもつか人々の願いと関連づけてみさせる.

(2) 先人の開発について時代的背景と結びつける．又当時の技術から苦心を考えさせる．

(3) むかしの開発と現在の開発の異なる点を比較検討し理解を深めさせる．(傍線筆者)

指導内容

(1) 郷土を開いた人々　　9時間

① むかしの郷土　　1時間

② 名古屋市南部の干拓（津金文左衛門）　　2時間

③ 三川分流工事　（平田靭負）　　2時間

④ 明治用水　（都築弥厚、外）　　3時間

⑤ 年表を見て　　1時間

(2) 土地を開く　　5時間

① 箱根用水　（大庭源之丞・友野与衛門）　　3時間

② 高浜山の防砂林　（井上恵助）　　2時間

(3) くらしを豊かにする努力　　8時間

① 愛知用水（浜島辰雄・久野庄太郎）　　4時間

② 名古屋市南部臨海工業地域　　1時間

③ 東名高速道路　　1時間

④ 県民の生活向上　　2時間」[10]

学習指導要領に示された項目が網羅され指導内容が極めて多いことが目につく．過去の開発，他地域の開発，現代の開発とうまく組織立てているが，何かに中心をおいて他はふれるのみの精選が必要である．時代の傾向とはいいながら当時は概念的知識をいかに理解させるか，情報収集の能力をいかに身につけさせるかなど多忙な計画で，教師中心の授業になりやすい．

一方新全総の基本目標は豊かな環境の創造であるが，経済成長と技術革新は国土利用の見通しより大型プロジェクトの推進の方へ傾いていった．公害についての問題が言われても，国や企業の対応は進まなかった．

「開発単元」のうち愛知用水や東名高速道路などが多く取りあげられ，現代の開発のすばらしさを理解させる方向へと指導の重点が進められていった．

名古屋市社会科研究会の愛知用水の指導計画を次に示す．

「愛知用水　4時間

目標　愛知用水のできるまでの経過を調べさせ，尾張丘陵から水の不足する知多半島まで用水をひいた人々の働きを理解させる．

指導計画

(1) 愛知用水と知多半島　　1時間

現在の愛知用水　・取り入れ口　　・幹線水路　・用水利用の様子

(2) 人々の働き　　1時間

愛知用水のできるまで　・水不足に悩む知多半島の人々

・久野庄太郎と浜島辰雄

(3) 開発の様子　　1時間

大規模な開発　・国と県の協力　　・世界銀行　　・進んだ技術や機械

(4) 明治用水との比較　　1時間

共通した苦心　・水への願い　　・工夫された技術　　・まとめ」[11]

留意点(3)にあったように，むかしと今との開発について次の表1のようにまとめ開発についての苦心を理解させることが求められている．

表1　愛知用水と明治用水

名称	人　物	主な水路	長さ	灌がい地域	工夫	完成
愛知用水	浜島　辰雄 久野庄太郎	木曽川→ 八百津→大府→ 半田→南知多→ 佐久島	・幹線 約112km ・支線 約102km	・尾張丘陵地 ・知多半島 15市11町	・トンネル ・サイホン ・水路橋	1961 昭36
明治用水	都築　弥厚 岡本　兵松 伊予田八郎	矢作川→ 豊田→安城→ 刈谷→碧南	・幹線 約 50km ・支線 約400km	・岡崎市 8市	幅50mの堤防を築きその上に水路	1880 明13

愛知用水公団は昭和30年（1955年）に設立され建設が始まり昭和36年（1961年）に完成した．高度成長期を代表する大規模プロジェクトの先駆として新全総のモデルとなった．その意味で現代の開発として教材化され，技術革新と世界銀行の借入金により進められた多目的な水需要に答える国土開発であった．

水不足の知多半島の生活用水と農業用水が主目的で始まったわけであるが，通水後は工業用水が最高となる皮肉な結果になったが，名古屋市南部の工業地域に近いという地理的条件もあったが，積極的な工業化の時代となったことが主原因であった．

児童はむかしと今の比較から，共通するものとして開発の苦心と水の大切さなどを認識し，もう一方では技術力のもつ力強さを理解していくのである．

Ⅳ　昭和50年代・第5次改訂時代　（1976年～1988年）

きょう土の開発「富士見を開く」　（第三次全国総合開発計画・昭和52年版学習指導要領の頃）

この授業は豊橋市立牛川小学校の遠山清美教諭が昭和62年（1987年）に実践し，翌年発表したものである．豊橋市立小学校社会研究会編の副読本4年には「きょう土を開いた人々」に高師・天伯原を開くと広い範囲が取りあげられているが，遠山は富士見町を取りあげ児童の住む地域と関係の深い狭い範囲で教材化している．

昭和40年代は経済優先主義で国土の開発は乱開発と批判された程，公害や汚染などの諸問題を発生させた．40年代の後半にその反省が起きはじめたが，第1回のオイルショックにより方向が転換した．昭和52年（1977年）に三全総が発表され，「人間居住の総合的環境の整備」が基本目標として掲げられ人間と自然の調和が求められた．

学習指導要領も落ちこぼれ落ちこぼし問題を踏まえ「ゆとりと充実」の観点から教材精選と授業時数の軽減が実施された．それにともない「開発単元」も簡素化された．先人の働きを当時の生活や技術，土地の条件から理解させるとなった．（傍線筆者）

遠山はこれ等のねらいを受けて授業実践を行った．富士見とは豊橋市の南部で天伯原台地にある戦後の開拓地である．高師原・天伯原は戦前，戦中は陸軍の演習地で，赤土のやせ地で小

松などが生えていた一帯である．この土地に入植した人々が土地を切り開き畑を作っていったのである．

導入は40年前の天伯原と今の天伯原の２枚の絵の比較から始まった．草や木だけの40年前と，きれいに整地され緑豊かな畑とビニールハウスの現在．ここから問題意識が起きてきた．天伯原はいつ頃から人々がはいってきたのか．富士見のむかしの名は何んといったのだろう等と．さっそく事実調べに入っていった．自分の家の祖父母に聞いてくるグループ．開拓農協へ調査に行くグループ．副読本を勉強するグループ等である．

まず入植について次のことがわかった．「昭和20年（1945年）に153戸が富士見に集ってきたが，その後13年間に64戸の人々が富士見から出ていった．」[12]という事実であった．原因さがしの話し合いで，その頃は機械がなくすべて人力の開墾で苦しく辛いということが挙げられ，全員が納得した．次の原因は「畑の土が悪く作物が実らないので、生活が苦しくなるばかりで，将来の見通しが暗かったことだ．」[13]と富士見町のある老人の話が出され，４年生なりに共感を示したのである．

残った89戸のその後の苦心についての資料集めでは生ゴミ集めが児童の興味をさそった．苦心した開墾ではあったが，地力がないため堆肥を入れると効果のあることはわかっても，周辺の生ゴミで不足し，遂に名古屋から貨車で二川駅まで運びそれを更に富士見まで運んだという事がわかり，児童の心を大きくゆさぶった．

大変の苦労だったからきっとよいことがあるはずと，調べさせると副読本「とよはし」から小麦のとれ高のグラフを見つけ，昭和21年から昭和40年の間に収量が６倍になった事実をつかみ，努力の大切さすばらしさを理解した．

さて，富士見の農業を一変させ野菜の大産地となった最大の原因は豊川用水の完成であった．山田もと著の「水の歌」は渥美半島の水不足に泣く農民の生活を描いた童話であるが，富士見町のある天伯原も同様に年中水不足に悩まされ，水不足に強い作物しか栽培できなかったのであるが，19年の歳月と500億円の経費により昭和43年（1968年）に豊川用水が完成した．

通水後は従前できなかった，夏はすいか・冬はキャベツやはくさいが栽培され，その上に温室・ビニールハウスも可能となり，トマト・メンロンもつくられることになったのである．

この実践は児童に満足感を与える学習になったが，その理由はまず自分たちの住んでいる地域の開発についての学習である点が挙げられる．「敗戦→入植→苦労（40％の脱落）→努力→豊川用水→安定」と約40年間の努力の結果が今自分の住んでいる所である．そして祖父母か老人に聞けば話がすぐ返ってくるので，大変な親近感のある調査のできた点である．

第二には現代の機械力による開発ではあるが，豊川用水による農業用水が作物の種類を増加させ，更に収量も大きく伸び地域に喜びと希望を与えた点である．

第三には富士見地域が，都市化・工業化せず野菜中心の農業経営で現在まで継続している点である．

三全総の目標には「限られた国土資源を前提にする．」とか「地域特性を尊重する．」などの項目が掲げられているが，「富士見の開発」は第二次大戦後に入植者（先人＝祖父母）が人力で苦心の上に畑を開墾した努力と，現代の開発の豊川用水とが融合し野菜の大産地の誕生となった典型的な開発であった．その上先人は個人名でなく富士見へ来た人々で近々40年程で，時間的にも理解しやすいのである．

V　昭和60年代，平成初期・第6次改訂時代（1989年～　　）

第四次全国総合開発計画は昭和62年（1987年）に発表された．基本目標は多極分散型国土の構築が掲げられ，一般目標にはうるおいのある国土や国際化の進展等が挙げられている．

しかし，現実は東京一極集中が進み，地域の活性化の名目のもとにリゾート開発やゴルフ場開発にともなう，環境破壊や環境汚染がみられ問題は大きく深くなっている．更に各地域は大規模な開発計画を掲げているので，四全総はその目ざす方向へ進むか不確定な要素も多いが，一応国の開発計画として実施されていくのである．

一方学習指導要領は平成元年（1989年）改訂された．「開発単元」は「地域の文化や開発」と，文化の言葉が今回初めて登場して注目を集めている．

文化については種々解釈されているが，指導書には「先人の具体例として，教育や文化の向上の面で活躍した先人の事例」と示している．

この文部省の意図を受け，今後各地域で新しい人物の発掘と教材研究が進められ副読本の改訂がされることが期待される．また教科書会社は平成3年度には新教材をもり込むことになるので，「開発単元」は大きく変遷することが予測されるのである．教材を新しく文化面で選ぶか，従前通りの開発面にしていくか，まことに興味がもたれるところである．

さらに四全総の計画をどう受けていくかについても期待してながめていきたい．

おわりに

社会科発足40年．平成4年度から低学年社会科は解体し生活科へと変っていくが，この変化は道徳の時間の特設に比肩すべき大変革である．

本稿は第1報に続いて「開発単元」の変遷を，カリキュラムや実践記録のなかにみてきたが，結果は表2の通りである．

表2　カリキュラム・実践記録

カリキュラム実践記録	西暦	昭和	開発内容・名称・場所	開発計画	学習指導要領
桜田プラン	1949	24	多摩川用水・江戸	復興国土計画	22年版
大淀プラン	1952	27	農業用水・宮崎	国土総合開発	26年版
佐濃谷川の授業	1956	33	農業用水・洪水・奥丹後	〃	30年版
田子の浦港	1965	40	築港・工業化・富士	全国総合開発	33年版
名古屋市プラン	1971	46	愛知用水・知多半島	新　全　総	43年版
富士見を開く	1987	62	開墾・豊川用水・豊橋	三　全　総	52年版
?				四　全　総	平1年版

やはり多く耳につくのは水に関する開発が多く，日本の国土・稲作が大きく影響していることがわかる．そして水に関係はするが次第に機械力を駆使した現代の開発について取りあげられている．

一方，田子の浦港に代表させたが，工業化の問題も開発の視点からよくとらえられているが，反面に公害の点があるので５年生へまわす傾向がみられる．

さて，「開発単元」の変遷の原因の最大な理由は，学習指導要領の改訂である．著名な実践者を除くと，学習指導要領のもつ規制力は否定できないものがある．この学習指導要領が社会の動きを反映して学習の方向・内容について取りあげていくのである．当然国の開発計画方針が「開発単元」にもり込められているのである．

いま一つは指導する教師も上記の諸要素をとり入れ，更に時代の方向に敏感に反応を示しながら教材を解釈し単元構成を進め指導方法を組み立てているのである．

以上の二点を本稿の六つのカリキュラム・実践のなかにみることができるのは，国家のもつ教育への影響力（規制力）の大きいことをよく示しているといえる．

文　　献

1）上田薫編　社会科教育史資料３　593　1988　東京法令出版
2）伊東亮三編　社会科教育の21世紀　115　1985　明治図書
3）　同　上　115
4）　同　上　120
5）大槻健編　社会科教育実践の歴史小学校編　142　1983　あゆみ出版
6）　同　上　147
7）上田薫編　社会科わかる教え方４年　184　1972　国土社
8）　同　上　190
9）　同　上　198
10）名古屋市教育委員会　小学校教育課程・社会４年　48　1971　名古屋市教育委員会
11）名古屋市社会科研究会　郷土資料集・下巻　127　1983　名古屋市社会科研究会
12）遠山清美　社会科教育別冊No. 15　117　1988　明治図書
13）　同　上　118
14）豊橋市立小学校社会科研究会　とよはし　95 1985　豊橋市立小中学校現職教育委員会
15）文部省　小学校指導書社会編　34～35　1989　学校図書